

2014年
第20回

函館港イルミネーション映画祭

第18回シナリオ大賞受賞作品

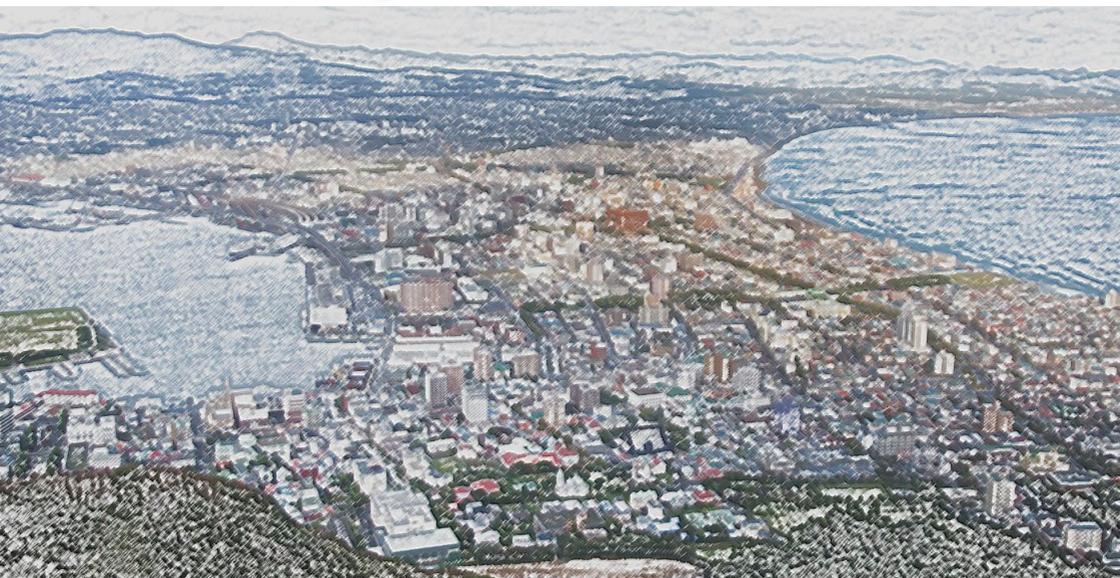
函館市長賞「グランプリ」

白孔雀

白い花嫁

白い米

室岡ヨシミコ





【作者プロフィール】

むろおか よしみこ

北海道旭川市出身 東京都在住

大学卒業後、バラエティ番組AD、カフェ店員、苦情受付、バー店員、事務OLなどを経験しながら、脚本の書き方を学び、2006年、伊参スタジオ映画祭にて受賞した短編脚本を自ら監督して映像化。各地の映画祭で上映活動を行いつつ、脚本修行中。

《受賞歴》

2006年 伊参スタジオ映画祭シナリオ大賞

2006 短編の部大賞

2008年 ふかやインディーズフィルムフェスティバル

2008 準グランプリ

2009年 小津安二郎記念蓼科高原映画祭短編映画

コンクール2009入賞

2014年 第10回 短編恋愛小説「深大寺恋物語」

入賞

【あらすじ】

35歳の誕生日に仕事と住む場所を失ったカコは、東京の酒場でいつものように酔っぱらい、「昔は可愛かったんですけどね」と昔の美しい花嫁姿の写真をみせびらかし現実逃避をしていた。故郷に帰ってやり直したい気持ちでいっぱいだが、それは出来ない。

25歳の時、地元函館で幼なじみの北斗からのプロポーズをなあなあに受け、結婚式の日を迎えたカコは、元彼の南田への想いを断ち切れず花嫁姿のまま失踪。そこから十年、年齢と体重を重ねて残念な姿になったカコは今更実家に帰れないのだ。

そんな中、インターネット経由で聞いた函館のラジオ番組から流れてきたのは、北

斗からの「どんな姿になってもカコを愛し続ける」というバースデーメッセージ。今の私にはアイツ位でちょうどいい！と喜んで十年ぶりに函館に帰ってみると……。

北斗がカコと呼んで愛していたのは、動物園の美しい白孔雀。結婚式の日にかコに逃げられた北斗は、白孔雀を「魔法で姿を変えられたカコ」と思い込み溺愛していたのだ。

見る影もなく年老いて太ったカコの姿をみた北斗は、カコのことを「おばさん」と呼び、カコであることを認めない。街のどこへいっても美しかった頃と比べられ、東京に居た頃よりも残念な日々を送りながらも、カコは少しずつ北斗との距離を修復して行く。

そんなある日、南田が函館に現れる。自分の十年を奪った男。カコは南田に許せない気持ちを抱きながらも、北斗から受けた誤解をきっかけに、南田と一緒に再び街を出る決意を固める。

街を出る日の朝、ラジオから流れてきたのは、白孔雀が死んだというニュース。前日、北斗から「俺は孔雀のカコと死ぬまで添い遂げる！」と言われたカコは、南田との約束を捨てて北斗を助けに行く。自分の気持ちにやっとなき合えたカコは、北斗を救い、北斗からようやく「おばさん」ではなく「カコ」と呼んでもらう。

この先もずっと北斗と一緒に居たいと思ったカコは、北斗がびっくりするようなプレゼントを贈ってプロポーズをする。

【登場人物】

白井カコ(25) (35) (12) (5)

残念な主人公

前田北斗(25) (35) (12) (5)

カコの幼なじみで元婚約者

南田修(35) (45)

カコの元彼・旅のカメラマン

前田徳(50) (60)

北斗の父 満天食堂の店主

白井広(50) カコの父 銭湯大勝湯の店主

白井里奈(30) カコの義母 (広の後妻)

白井璃子(4) カコの義妹 (里奈の娘)

鳥爺(70) 旅で函館にきた謎の老人

後輩OL

高円寺のスナックのマスター

高円寺のスナックの常連客

ラジオDJ (声のみ)

飼育係1、2

どつくの作業員1、2

天ぷら屋の主人

天ぷら屋の女将

天ぷら屋の常連客 寺田

バーのママ

バーの常連 森田

北斗の後輩

警察

函館山のカップルの男・女

大衆酒場の店員

野次馬

○函館 船見公園

街と港を見下ろす山の上の公園。

真っ赤なブランコをこぐ純白のウエディングドレス姿の美女、白井カコ(25)。

その様子を嬉しそうに携帯電話のカメラで撮影する紋付袴姿の前田北斗(25)は、坊主頭に眼鏡の冴えない男。公園のすぐ裏にある神社から前田徳(50)が声をかける。

徳「北斗、町会長さんに挨拶するぞ！」

北斗「カコ、俺、先行つてくるわ」
神社の方に戻つて行く北斗。

カコ、携帯電話で「今日お嫁にいきます。きれいでしょ？」とメールを打ち花嫁写真を添付する。

携帯電話を片手に再びブランコを漕ぐ。

ブランコが一番高いところまで行つたところで、青空に携帯電話をかざし、メールの送信ボタンを押す。

カコ「とんでけー！ー！ー！ー！ー！ー！」

タイトル「白孔雀 白い花嫁 白い米」

○古い雑居ビルの女子トイレ 朝

水を流す音に混じって嘔吐する音。

片方の個室の扉が開き「赤ちゃんがあります」の印をつけたOLが出てくる。

テロップ「十年後 東京」

もう片方の扉からは嘔吐の音が続く。

個室の扉が開き、丸々とした体型、色白だが化粧つけがなく疲れた表情のOL制服の白井カコ（35）が出てくる。

OL「もしかして、カコ先輩も？」

OLが幸せな顔で妊婦のジュエスチャー。

カコ「いやっ、えーと、私はナニがアレで」

カコ、出っ張ったお腹を凹ませると再び吐き気を催し個室に駆け込む。

○古い雑居ビル内のオフィス 朝

社員十名弱の小さなオフィス。

席でシジミ汁を飲むカコの手が止まる。

カコ「倒産……」

社長の声「すまん。今月いっぱい」

カコ「……うっ、ちょっとすみません」

口を抑えて部屋を出ていくカコ。

苦い顔をしている社員達。

○高円寺 繁華街 夜

飲み屋のネオンのひしめく繁華街。

○立ち飲み屋 中 夜

おじさん達に混じって瓶ビールをどんどん開けるカコ。

カコ「でも負けない、飲めばやってける！」

○高円寺 繁華街 路上 夜

郵便ポストに寄り添うように体育座りで笑いながら寝ているカコ。

すぐ横のカラオケスナツクの扉が開き、マスターがカコを店に連れ込む。

○高円寺 カラオケスナツク 中夜

薄笑いを浮かべながら寝ているカコ。

マスター「今日も定位置にて捕獲。おい、

カコちゃん！」

カコ「はいはい、大丈夫、へへっ」

常連「昨日も全く同じ光景を見た気が……」

マスター「僕、今週3回目っす」

常連「で、本日の残念は？」

カコ「倒産だそうです！ 手に職も若さも

体力もない。もう就職出来る気がしな

い！」

常連「何かないの？ 出来ること」

カコ「昔は色々出来ただけどなあ……う

ーん……あつ、あつた！ ほらー！

荷造り用の紐を使って、あやとりで

5段はしごを作ってみせるカコ。

マスター・常連「おー！」

カコ「それからあ」

あやとりで、雲の中に月が浮かぶよ

うな「月に群雲」の形を作る。

常連「あ、これ知ってる、月に群雲」

カコ「何それ？ 十字街の月だよ」

カコと常連、2人あやとりで遊び出す。

マスター「でも、どうすんの？ 家、会社

の寮なんでしょ？」

常連「この際、帰ったら？ 地元」

カウンターに突っ伏すカコ。

マスター「あー、地雷その1」

カコ「帰れるものなら十年前に帰ってますよ」

常連、あやとりで盃を作り見せる。

常連「まあとりあえず飲め。飲まなきゃやつてられない夜もあるよな」

カコ「違う！ 飲めばやつてけんだよ！」

常連「おー、何か前向きない言葉だな」

マスター「（小声で）意味同じですけどね」

カコ「でしょ。大好きな人に教えてもらった魔法の呪文。この言葉のお陰で十年間、

この東京砂漠で一人でも生きてこれた」

常連「あ、そうだ、結婚は？ 高望みしな

ければ、出来るんじゃない？ まだ」

カコ「（野太い声ですごむ）ああ！？」

マスター「あー、地雷その2」

カコ「別に行けない訳じゃないですからね、

私だって昔は可愛かったんですからね」

携帯電話の待ち受け画面を見せるカコ。そこには美しい花嫁姿のカコの

写真。

常連「誰？」

カコ「可愛かったの！ 昔！」

常連、目の前のカコと見比べ愕然。

常連「十年で、一体何があると……」

カウンターに突っ伏すカコ。

カコ「忘れようとしても、思い出せない」

マスター「毎晩毎晩、飲んで忘れてきたんだもんね。あ、ビールでいいね」

出されたビールを一気飲みするカコ。

マスター「（いい声で）こうして女は若さと

記憶を失い、糖分と脂質を蓄えたのだ」

カコ「うまいこと言うな（再び突っ伏す）」

常連「ていうかカコちゃん、バツ一なんだ」

マスター「長いよ。その箱開けちゃうと」

マスター、カラオケで「雨の函館」

を入れてマイクを握る。

マスター「手短に説明しましょう」

ドラマ仕立ての映像が流れ出す。

カコ「どうせ安手のカラオケビデオみたい

なもんですよ、私の人生なんて」

以後、マスターのカラオケに合わせて

てカラオケのビデオ風に回想が流れる。

る。

○回想 函館港フェリーターミナル

イントロに合わせて函館の実景。

カコN「私の育った街は北の港町、函館」

抱き合うカコ（25）と南田修（35）。

マスターの歌声が背後に流れている。

カコN「初めて本気の恋をしたのは、世界

中の港街を渡り歩くカメラマン。私はた

だの函館港の女。わかっていても忘れら

れず」

出港する船から手を振る南田。

泣きながら裸足で追いかけるカコ。

倒れ込んだカコに白いハイヒールを

プレゼントする北斗（25）。

○回想 船見公園

白い靴をはきウエディングドレス姿

のカコ（25）が赤いブランコをこぐ。

歌「♪他の男にこの身あずけて断ち切るは

ずが断ち切れず、だめな、だめな、だめな、

私ね……」

花嫁姿のまま坂道を駆け下りて行く
カコ。ブランコの下に片方だけ残さ
れた靴。靴を持って立ち尽くす北斗

(25)。

○回想戻り カラオケスナック 中夜

満足げに歌っているマスター。

ウイスキーをあおるカコ(35)。

常連「本当にあるんだ、そんなカラオケの

ビデオみたいな話。で、その男とは」

カコ「それっきり。酷くないですか？ 会

いたいって言ったの向こうですよ？ 可

愛いでしょって花嫁姿送ったらソッコー

で返事きたから飛んでったのに……」

カウンターに突っ伏して凹むカコ。

カコ「そんな訳で帰れずはや十年……」

常連「何か、辛くなっちゃった」

歌を途中でやめたマスター、鮭の缶
詰にロウソクをさして差し出す。

マスター「まあ元気だして、ハッピーバー
スデー、カコちゃん」

常連「今日?! てか、何故に鮭缶?」
更に苦い顔をする常連。

マスター「いつか生まれた川に帰れるよう
に」

カコ「ありがとう、マスター」

ロウソクを吹き消し、突っ伏すカコ。

カコ「あー、でも無理だよー。アイツに許
してもらえない限り」

携帯の写真、カコの横に写る紋付袴

姿の北斗の顔を爪楊枝で刺すカコ。

カコ「今の私ならもう、こいつ位で充分な

○走る寝台特急北斗星（夜）

○夜明けの街を走る北斗星

○北斗星 寝台車内（夜）

○函館駅前 朝

暗闇を走る車窓を眺めるカコの手には片方だけの黄ばんだ白いハイヒール。

駅前立つカコ、思い切り深呼吸。
カコ（歌う）はーるばる来たぜ以下略♪
ていうか駅、超立派になつてるし！ うわー！ 市電！」

カコ「何だよ、待つてるなら待つてるって、

早く言えよな、おにぎり眼鏡野郎！」

電停に向けて走り出すカコ。

鼻歌でハッピーバースデーを歌うカ

コ。

○電停 函館駅前 朝

浮かれて暗い車窓に自分の姿を映し

ポーズやキメ顔を工夫しながら

函館どつく行き of 電車がやってくる。
路面電車に乗り込むカコ。

カコ「シンデレラが迎えに来てやったぞ！

カコ（運転手に）今日、北斗でてます？」

うーん……いや、シンデレラ参上！」

首をかしげる運転手。電車が動く。

乗客の声「うるせえ！！」

○電車・車内 朝

カコ、片手に靴を持ちニヤニヤしながら街の様子を見る。

すれ違う電車が来る度、運転手を凝視。

アナウンス「次は終点、函館どつく前」

○電停 函館どつく前 朝

電車を降りるカコ。すぐ前にある満

天食堂の前で立ち止まり、中を伺う。

仕込みをしている前田徳（60）が見

える。

カコ「変わんないな」

そのまま坂道を上って行く。

○大勝湯 前 朝

カコが坂道を上っていくと、ピンク色のモダンな建物の銭湯、大勝湯がある。

カコ「変わんないな」

カコ、入り口前で立ち止まって深呼吸。

カコ「えっと……、ただいま？ ひさしぶ

り？ ごぶさた？ ……えっと、えっと」

中から白井璃子（4）が駆け出してくるのを追って出てくる白井里奈（33）。

里奈「こら！ 璃子！！」

璃子「きゃー！！！！」

驚いて2人を見ているカコ。

カコ「誰？」

出てきた白井広（50）に飛びつく璃子。

璃子「パー！！」

楽しそうに笑い合う広、璃子、里奈。

カコ「ええー……？」

カコに気付き振り向く3人。

璃子「おばちゃん、だーれ？」

カコ「おば……」

広、眼鏡をかけ直し近づいて凝視。

カコ「ただ……い、ま……」

広、更に近づいて凝視。

広「カコ……、なのか？」

○白井家 居間

ちゃぶ台で向かい合うカコと広。

里奈と璃子を見るカコ。

カコ「えーっと、これはどこから説明を」

広「してくれるんだ！？ え？」

カコ「あ、私が……ですか、ですよ、はい……、えっと、お久しぶりで……」

い……、えっと、お久しぶりで……」

広、カコの顔から全身を凝視し、仏

壇に飾られたカコの花嫁写真と見比

べる。

広「本当に、本当に、カコなんだな」

璃子「カコ？ くじやくひめ！？」

里奈「こら、璃子！（口をふさぐ）」

カコ「その節は、大変なご迷惑を」

広「かけた娘は、もう死んだ、と思ってお

ったが」

カコ「すみません……でそちらの方々は」

里奈「家内の里奈です。こっちが娘の璃子」

カコ「……（口をほかんと開ける）」

チャイムが鳴り引越業者が入って

る。

広「お前、何を勝手に!!」

幸せそうな様子をみて溜息をつくカコ。

○大勝湯 女湯脱衣所

隅に無理矢理荷物を押し込む引越業者。

その様子を見ている里奈とカコ。

里奈「何か、すみません、カコさんの部屋、

私達の荷物でいっぱいです……」

カコ「いえ……、こちらこそ……」

広「で、どうすんだ、仕事は」

カコ「落ち着くまでは店手伝いながら……」

広「バカ言うな! 仕事なんて2人で十分」

璃子「ぱぱー、璃子もいるよ」

広「そうか、そうだよな! 璃子とパパと

ママと三人だもんなー!」

番台に座って得意げな璃子。

里奈「あ、ありますよ! 人探してる所」

カコ「本当ですか?」

里奈「困ってたから絶対即採用ですよ!」

璃子「ねえ、ママ、璃子、くじゃくひめの

所いきたい」

広「ママお仕事だし今日じゃなくても」

璃子「やだー! くじゃくひめ見たいよ」

里奈「だーめ、一人じゃ行けないでしょ」

璃子「やだ! じゃあこのおばさんと行く!

おばさん、連れてって!」

カコ「おば、おばさんじゃなくてお姉さん」

○電停 函館どつく前

カコに手を引かれ電車に乗る璃子。

里奈「すみません」

カコ「大丈夫、どうせ暇だし」

発車する電車。

○大勝湯 浴場

掃除をする広と里奈。

広「北斗、今日仕事じゃないのか……」

里奈「早い方がいいでしょ、いつかは知る

ことなら」

広「そうだけどなあ……」

○電車 車内

一番前に座り、すれ違う運転手をチ

エックするカコ。

璃子「電車好きなの？」

カコ「電車、うーん、運転手さんみてた」

璃子「イケメン!？」

カコ「じゃないけど、まあ、いいいやつ」

カコ、鞆の中の白い靴を見る。

璃子「なーんだ」

○函館公園 遊園地

古い遊具の並ぶ小さな遊園地の前を

手をつないで通り過ぎるカコと璃子。

璃子「おばちゃん、璃子これやりたい!」

バズーカ射撃を指差す事子。

カコ「お小遣いない。今度ママとやんな」

璃子「えー、ケチ」

カコ「今日はくじゃくひめなんでしょ?

ていうか何、くじゃくひめって」

動物園の看板の方に歩く2人。

璃子「くじゃくのお姫様だよ」

古い小さな観覧車の周りを新幹線の遊具が回っている。

カコ「なつかしー！ まだあったんだ！」

○回想 函館公園 遊園地

新幹線の遊具の一番前の席を奪い合うカコ（5）と坊主頭の北斗（5）。

北斗「カコ、僕が運転手なの！」

カコ「うるせえ！ ばかおにぎり！」

北斗を突飛ばし、一番前をとるカコ。

北斗「（泣きながら）運転するのー！」

○回想戻り 函館公園 遊園地

電車の遊具をみながら笑うカコ。

カコ「本物、乗ってるんだもん、凄いな」

○函館公園 動物園

鳥小屋の前に人ばかりが来ている。

駆け寄る璃子とカコ。

璃子「くじゃくひめ！」

小屋の中、真っ白い羽を広げた美しい白孔雀がゆったり歩いている。

頭に白い冠羽を載せ、歩く姿はドレスを着た花嫁のように美しい。

歓声とカメラのフラッシュがたかれる。

○フラッシュ

カコの十年前の花嫁写真。

その美しい姿と白孔雀がそっくり。

○元の鳥小屋前

丸々として歳をとったカコ。

飼育係「フラッシュはたかないで！ ああ」

羽を閉じて長い尾を引き歩き回る孔雀。

観客たちが去って行く。

飼育係の声に振返るカコ、驚く。

愛しそうに孔雀を見つめる飼育係（顔は見えない）。

飼育係「（孔雀に向かって優しく）大丈夫だ

ったかい？ カコ……、」

孔雀小屋の前の看板には「ロベルト」と名前がついている。

璃子「あ！ 北斗だ！」

振返った飼育係は前田北斗（35）。

坊主頭に眼鏡。十年前と変わらぬ外

見。

璃子を親しげに抱き上げる。

北斗「おー、璃子！ あれ？ ママお仕事

じゃないの？」

璃子「うん、だからオバさんときたの」

カコの顔を見る北斗。硬直する。

カコ「北斗……？ あれ？ 電車は？」

北斗「……（硬直したまま啞然）」

カコ、靴を取り出しヒール部分を持つて、くるくる回しながら近づく。

カコ「笑顔で）シンデレラが迎えにきてや

ったぞ！ 眼鏡ライスボール！」

北斗、後ずさり鳥小屋にぶつかる。

孔雀が驚き、声をあげる。

北斗「ごめん、カコ。びっくりさせて（愛しそうに孔雀を見つめる）」

カコ「へ？ えっとその、北斗、だよね。うん、

全くもって変わってないもんね」

北斗、孔雀を見る優しい表情から陰

しい表情にかわり

北斗「誰だよ、おばさん」

カコ「へ？」

北斗「璃子、知り合いか？」

璃子「わかんない。今日の朝きたの」

カコ「いやあの、わかんないかな？ どん

な姿でも愛すると……私だよ、カコ」

北斗（大声で）ああ？ カコはな、十年前

に孔雀に姿を変えられて……なあ」

璃子「いつか愛の力で人間に戻るんだよね」

カコ「（ぽっかーん）」

北斗「で、おばさん誰だよ？ おばさん！」

○函館公園 遊園地

バズーカ射撃を激しく打ちまくるカ

コ。

カコ「死ぬ！ ばかおにぎり死ぬっ！」

璃子「お小遣いがないって言ったのに……」

カコ「つーか、誰だ孔雀姫って？ あれ才

スだろ！？ ロベルトだろ？」

命中して風船がパシュッと割れる。

○大勝湯 女湯脱衣所 夜

缶ビールをぶしゅつと開ける音。

閉店後の銭湯。片付けをする里奈。

缶ビールを飲みながら、段ボールを

整理するカコ。空き缶が8つ並ぶ。

カコ「飲んでもやってけねー！」

段ボールから指輪の小箱が出てくる。

指輪と一緒に領収書と北斗の給与明細3ヶ月分がきっちり畳んで入っている。

カコ「そういうセコい男なんだよ、ねえ、里奈さん！ 信じられます？ 婚約指輪と一緒に領収書渡してくるやつ」

里奈「え！？」

カコ「恩着せがましく、給与明細まで」

里奈「北斗さん？ どんなプロポーズで？」

カコ「覚えてないよ、酔ってたから。でも領収書つきの指輪なんて、どうでもいい話だったんでしようよ、どーせ。おにぎり野郎のやりそうなことだよ」

ラジオが聞こえている。

ラジオDJ「ラジオネーム眼鏡ライスポールさんから、今日もカコの美しさに皆が

大喜び、でも皆、フラッシュはたかないで……」

カコ、空になった缶を握り潰し、白い靴を空いている靴箱に投げつける。

○電停 函館どつく前 朝

電車が出て行く。

駅前の、満天食堂から声がする。

里奈の声「やつぱ、だめでした？」

○満天食堂・中 朝

開店前の食堂のテーブルに履歴書。

徳の向かいに並んで座るカコと里奈。

険しい顔の徳にテヘッと笑う里奈。

徳「確かに、人はすぐにでも欲しいが」

里奈「人手も増えて、北斗さんも普通に戻

「つたら一石二鳥かなーって……」

徳「確かに俺も、もしかしたら本物に会えば目え覚ますかと思っただけどよお……（カ

コの全身をみて溜息）」

カコ「本当にすみません。里奈さん、折角だけど私、体力ないし、ここの仕事超キツいのよーく知ってるし。第一、北斗が……」

机の履歴書を取り下げようとするカ

コ。

奥の扉が開き、北斗が出てくる。

カコ「げっ、いやこれは別に」

北斗、カコと履歴書をちらりと見る。

里奈「すみません、勝手なことして」

北斗「里奈ちゃん知合い？ このおばさん」

カコ「ああ!？」

北斗「ババアにつとまる仕事じゃねえんだ

よ。な、父ちゃん」

カコ「同じ歳だろ!」

北斗「あ、そうなんですか。年齢より老けて見えますね」

カコ「何よ、アンタは年齢不詳過ぎんだよ」

北斗「とにかくまあ、ご老体にはきつい仕事ですよ。ババアには無理無理」

出て行く北斗。

苦い顔で北斗を見送る徳と里奈。

カコ「ぎいいいいっつ。おじさん、出来ます!」

ババアじゃないからやります!」

徳「(鋭く睨み) いいんだな、本当に。容赦しねえどころの話でねえぞ!」

カコ「目をギラつかせながら) よろしくお

願いします!」

○函館どつく 敷地内

巨大な船を造る造船所。

食堂棟の建物の前に停まる軽ワゴン

車。

重たい出前箱を両手で持ち上げる力

コ。

○函館どつく 敷地内の食堂 中

出前箱を両手に持って入ってくる力

コ。

カコ「お待たせしました満天食堂です」

作業員1「遅いよ、オバちゃん、新人？」

カコ「オバ……」

作業員2「おーい、オバちゃんこっちも！」

汗だくで出前箱を持って動き回る力

コ。

重たい出前箱を気合いで持ち上げる。

カコ「(野太い声で) ぐう???!」

○函館山公園 動物公園

鳥爺「ぐう???! ぐわあわあわあ???!」

鳥小屋の前で様々な寄声を発している謎の老人、通称、鳥爺(70)。

鳥爺、首から「鳥との通訳引き受けます」という札を下げている。

北斗が弁当を持ってやってくる。

北斗「師匠、お弁当です！」

鳥小屋の前のベンチで、時折寄声を交えつつ弁当を食べる鳥爺と北斗。

北斗「今日のカコは何と言ってますか？」

鳥爺「北斗、愛してる。だそうです」

北斗「ありがとうございます！」

距離を置いて見ている飼育係1、2。

飼育係1「おー、今年も鳥爺の季節か」

飼育係2「アレで全国渡ってるらしいからな。何者なんだべ？ 随分北斗と仲良いけど」

飼育係1「命の恩人だからな」

飼育係2「そうなの？」

飼育係1「北斗があれ、花嫁さんに逃げられて落ち込んだ時、鳥爺が孔雀になっ
たって言い出して」

飼育係2「はー、そうだったの。で、大丈夫

夫なのかい？ 北斗の頭は」

親しげにお弁当をつまむ北斗と鳥爺。

飼育係1「なんも、普通に仕事もしてるし、
そこまでバカでねえべ。あれだな、現実

逃避ってやつだ」

鳥爺「ワシ、そろそろ次の街へ行こうかと」

北斗「えー、もう少し居て下さいよ！ そ
うだ師匠、肉好きでしたよね、焼肉。オ
ゴリますから。豚のでっかい固まり肉と
か」

ヨダレをすすする鳥爺。

鳥爺「仕方ないな、ではもうしばらく」

○満天食堂・厨房 夜

片付けをしている徳とカコ。

疲れ果て放心状態のカコ。

厨房の炊飯器から湯気が出ている。

作業着姿の北斗が帰ってくる。

北斗「ただいま……ってババアまだいたの
かよ？」

カコ「若い力が必要とのことで、今日から

お世話になります」

徳「次見つかるまでな。馬車馬のように働
くつつーからよ。あ、北斗メシ炊けたわ」

炊飯器の蓋を開ける北斗。広がる湯
気を顔に浴びて幸せそうな顔。
その様子をみているカコ。

○回想 満天食堂 厨房

炊飯器の蓋を開け湯気を浴びるカコ
(5)と北斗(5)。

北斗の曇った眼鏡に人差し指で目の
ラクガキをするカコ。

○回想戻り 満天食堂 厨房

カコ、北斗の曇った眼鏡に差し出し
てしまった人差し指を慌てておろす。

カコ・北斗「あ……」

北斗、動揺して眼鏡を外す。

北斗「な、馴れ馴れしいんだよ、ババア。

飯がまずくなる。さつさと帰れよ！」
カコ「言われなくても帰るよ、バカ！」
食堂を出て行くカコ。

○大勝湯 裏口 夜

窓から家族団らんの食卓の音がする。
立ち止まり、中に入れないカコ。

○函館 松風町エリアの繁華街 夜

古めかしいお店やバーが並ぶ繁華街。

○天ぷら屋 中 夜

カウンターで一人、ビールを飲むカ

コ。

カコ「ふはー、飲めばやってける！」

目の前で天ぷらのカラカラ揚げる音。

店主が芋天にたれをつけて差し出す。

店主「はい、おまけ」

カコ「毎度どうも！ 相変わらずイモ天、

最高！ 甘辛タレと芋がビールに合う

っ！」

店主「前来たことあったかい？ 旅行？」

カコ「えっ、あー、まあ……」

カウンターで飲んでいる常連客の寺

田。

寺田「一度食べたら忘れられないしょ。俺

なんてもう20年」

カコ「テラさん？」

寺田「あれ？ 会ったことあったかい？」

カコ「……まあ……」

瓶からついだビールのグラスに写る

自分の顔を見つめるカコ。

○回想 天ぷら屋 中夜

ビールグラスに写る美しいカコ(25)。

カコの横に北斗(25)、寺田や店主と

ともに楽しそうに飲んでいる。

○回想戻り 天ぷら屋 中夜

グラスの中の泡が消えて、太って年

老いて別人のようなカコ(35)の姿

が写る。

カコ、溜息を消すようにビールを飲

む。

ドアが開き北斗が入ってくる。

北斗「うわっ」

カコ「げっ、北斗」

寺田「なんだ、北斗の知り合いか」

北斗「ああ？ ただのパートのおばさん」

女将が出てきて北斗に瓶ビールを出す。

女将「あらやだ、ちよつとカコちゃん？

カコ「おばちゃんよね！」

カコ「おばちゃん！」

寺田「ええ！ 孔雀のお姫様？ 嘘だべ？」

カコの顔からつま先までを凝視し、ため息をつく寺田。

女将「ちよつと、テラさん！ んまあ、カ

コちゃん、何年ぶりさ？」

カコの顔からつま先までを凝視し

女将「……ちよつと、ふっくらしたわね」

カコ「(テンション低く) まあ……」

寺田、携帯の画面を見せて

寺田「いやいや、だつてこれだよ！ カコ

ちゃんつたらよお、弁天町の白い孔雀！」

画面にはカコの美しい花嫁写真。

寺田「いやあ、信じられねえべ。あのお姫様が……(目の前のカコを凝視し) ねえ」

カコと北斗、同タイミングでビールを飲み干しグラスをドンと置く。

北斗「(大声で怒鳴る) テラさん！ 失礼な

こと言つてんじゃねーよ！」

カコ「北斗……」

カコ、嬉しそうに北斗の顔を見上げる。

北斗「カコが、こんな枯れたババアになる

訳ねーだろ！ 言つただろ、カコはなあ、

十年前に孔雀にされちまったって！」

北斗、携帯電話の待ち受けの白孔雀の写真を見せびらかす。

一同、北斗を残念な眼差しで見守る。

北斗「ババアの隣じゃ、酒がまずくならあ」

ビールを一気飲みして出て行く北斗。

カコ「何だと！？ バカおにぎり野郎が」

取り残されたカコ。

カコ「何か、すみません……」

寺田「いや、こっちこそ……悪かったね」

カコにビールをお酌する女将。

女将「でもね、北斗、あれでも随分まとも

になっただよ」

カコ「あれで!？」

女将「居なくなつてすぐは見つけれなかつ

たもん」

店主「片方の靴もつて街中ウロウロしてな」

寺田「変な商売女にも騙されてたもんね」

○松風町 繁華街 夜

ネオンの中をふらふら歩くカコ。

古いバーの前で立ち止まり入る。

○バー 店内 夜

古めかしいがオシャレな内装のバー。

客で賑わっている。

ママに案内され、空いているカウン

ター席に座るカコ。隣に北斗が居る。

北斗「うわっ、ついてくんよ、ババア」

ママ「北斗、お知り合い?」

北斗「パートのおばさん」

ママ「そうでしたか、はじめまして」

カコ、愛想笑いをし北斗の足を踏む。

北斗のボトルを見て苦笑するカコ。

カコ「焼酎キープとか。スナックかよ」

ハイボールを一気に飲み干し、財布を出すカコを凝視するママ。

ママ「ねえ、もしかして……」

棚の奥のボトルを出そうとするママ。

北斗「いいよママ、おばさん帰るって」

カコ「(北斗に舌打ちし)ごちそうさま」

お金を置いて店を出るカコ。

ママ「ねえ、もしかしてカコちゃん？」

○繁華街 バーの前の道 夜

店を出るカコ。

携帯電話の花嫁写真を消去する。

○満天食堂 厨房

忙しそうに大量の炒飯を炒める徳。

ジャージ姿で出前箱に皿を詰めるカ

コ。

徳「モタモタすんな！ 馬鹿野郎！」

カコ「すみません」

化粧つけもなく汗だくなカコの顔は、

疲れて更に老けて見える。

○満天食堂 前夜

のれんのおりた店から出てくるカコ。

疲れ果てて歩いていると雨が降り出

す。

雨に濡れみすぼらしい姿が窓に写る。

そのままぶらりと線路沿いを歩くカ

コ。

○谷地頭温泉 前夜

雨はやみ、星空が見える。

ずぶ濡れのカコがやってくる。

真っ赤にペンキで塗られた古い自転

車が停まっているのを見つけるカコ。

カコ「うわっ……最悪」

そのまま建物内に入って行くカコ。

○谷地頭温泉 露天風呂 女湯 夜

星の形の露天風呂に茶色いお湯の温

泉。

カコ、肩まで入ってうめき声を上げる。

カコ「ぐうわ？、温泉はほっこりするなあ」

男湯側から扉の開く音とお湯に入る音。

北斗の声「ぐうわ？、ほっこりするなあ」

カコ、顔を鼻まで顔を沈める。

男湯から後輩の声がする。

後輩の声「ああ、北斗さん！ 珍しいな」

北斗の声「たまにはほっこりしたくてよ」

後輩の声「聞いてくださいよお、さっき、

彼女にプロポーズしたんですけどね、安

いながらも婚約指輪買って」

北斗の声「いくら位の？」

カコ（小声で）でた、金に汚いの」

○谷地頭温泉 露天風呂 男湯 夜

露天風呂に浸かる北斗と後輩。

色白でだらしない北斗と対照的に後

輩の体は色黒で引き締まっている。

後輩「まあ金ないし15万くらい」

北斗、手の水鉄砲で後輩に水を飛ばす。

北斗「ダメだよ、そんな安物じゃー！」

後輩「彼女と同じこと言わないでくださいよ、給料3ヶ月分なんて無理っすもん」

北斗「無理なら無責任にプロポーズなんてすんな！」

○谷地頭温泉 露天風呂 女湯 夜

カコ、男湯側に近づき話をよく聞く。

北斗の声「給料3ヶ月分てのはなあ、もし自分に何かあっても、当面の生活費になるようにって、そのくらい責任持ちますって、そういう意味を込めて贈るものなんだぞ」

カコ、驚いた顔。

○谷地頭温泉 露天風呂 男湯 夜

後輩「かっこいいーな、北斗さんそんなキャラだっけ？ で、やったんすか？」

北斗、そのまま温泉に顔を沈めて行く。

後輩「あつ……今年はいかがが遅いみたいっすね、7月ならないと漁もなかなか……」

北斗「いいよ、無理矢理話そらさなくて。

やったよ、きっかり3ヶ月分」

後輩「かっけー！ 喜んでた？」

北斗「したら、アイツ何だったと思う？」

そこまで言うなら領収書と給与明細もつけてよね、質に出す時困らないようにって」

後輩「うわー、わやですな」

北斗、タオルを浮かべて空気を入れてプレゼントの包みのように膨らます。

北斗「けどよ、一生に一度のプレゼントだから、叶えてやるのが男ってもんだろ」

後輩「かつこいー、さすが北斗さん」

タオルの空気を水中で潰す北斗。

北斗「それをまさか、酔って覚えてないと

はな……」

後輩「え？ いやいや、そんな大事な話、

飲みながらしちゃダメでしょ！」

北斗（大声で）飲まなきゃ言えねえだろ！

恥ずかしくて」

○谷地頭温泉 露天風呂 女湯 夜

北斗の言葉に笑ってしまうカコ。

後輩の声「けどそれ、彼女も照れ隠しですって。そんな大事な事、忘れる女居ませんよ。ただのバカでしょ、本当に忘れてたら」

カコ、ぶくぶくと息を吐きながら、そのまま顔をお湯に沈めて行く。

カコ「バカですよー、はい、ばかですとも」

○谷地頭温泉前 夜

赤い自転車の後部座席に座り、ペダルを回しながら缶ビールを飲んでいくカコ。

錆びたチェーンがキィキィと鳴る。湯上がりの北斗が一人で出てくる。

北斗「わっ、何してんだよお婆さん」

北斗に缶ビールを投げるカコ。

驚きキヤツチする北斗。

カコ「さすが、元キヤツチャー」

北斗「勝手に乗るなよ」

カコ「それやるからさ、乗せてってよ」

北斗、ビールを飲み干しつつ

北斗「しらねーよ、電車で帰れよ」

カコ「乗れないよ、こんなずぶ濡れじゃ」

カコ、服が濡れて下着が透けている。

北斗、シャツを脱ぎ、カコに渡す。

カコ「あ、りがと……」

北斗「(目をそらし) 迷惑なんだよ、ババア

の下着なんて誰も見たくねーからな」

○線路沿いの路上 夜

雨上がりの星がきれいな空の下、上半身裸で自転車をこぐ北斗。その後

ろに北斗のシャツをきたカコが乗っている。

チエーンのかしむ音が鳴り続ける。

警察の自転車が近寄り止められる。

警察「ダメだよ、二人乗り。それから、何

であんた服きてないの？ ちよつとい

い？」

職質される北斗を笑いながら見るカ

コ。

北斗「笑ってんじゃねーよ！」

○蓬萊町あたりの線路沿いの路上 夜

二人乗りするカコと北斗に再び警察が近づく。

自転車を降りるカコ、北斗の自転車を押しながら護国神社坂を登って逃

げる。

カコ「服、買ってやるよ！」

○函館山ロープウェイ乗り場 夜

お土産売り場でダサイTシャツを北斗に見立てるカコ。楽しそうな2人。

カコ「ダセーやつほど良く似合う！」

北斗「うるせえ。てか、これダセエか？」

北海道の地図にアイラブ函館と書かれたダサイTシャツが良く似合っている。

カコ「いいよ、似合ってるからそれにしな」

北斗「今笑ってただろ？ ばばあ」

カコ「折角だから上ろうぜ、久しぶりに」

○函館山 山頂 展望台 夜

着飾ったカップル達がいちゃつく中、ダサイTシャツの北斗とカコが微妙な距離感で美しい夜景を見ている。

カコ「すーげー！！ やっぱすげー！！」

北斗「別に珍しくもないだろ」

いちゃつくカップルの会話が聞こえる。

女「ねえ、あれが北海道のココでしょ？」

北海道型のクッキーの渡島半島のくびれ（八雲町の辺り）を指差す女。

男「案外小さいね。ちっちゃいどー！」

笑い合うカップル。

目をあわせ苦笑するカコと北斗。

カコ「バカだなあいつら。ここだよ、ここ」

北斗のTシャツの北海道地図、函館

の辺りを指差すカコ。

北斗「あふんっ……」

カコ「何感じてんだよ？」

北斗「か、感じてなんかねーよ、つーかお

前だつて同じ間違いでただろ？」

カコ「小学校の頃のこといつまでも言うな」

カコ、ふと気付いて北斗の顔を見る。

北斗、カコの視線に気付かず

北斗「函館で生まれて育ったクセに。非国

民にも程があるよな、本当昔からカ……」

北斗、慌てて口を閉じ顔をそらす。

北斗「カ、ツカレーが食いてえな、小池の」

カコ、北斗を覗き込み、にんまり。

北斗「うるせえ！」

カコ「何も言つてねーし」

北斗「俺、もう降りるからな、おばさん」

カコ「この野郎！」

○路上 十字街 夜

自転車2人乗りで走る北斗とカコ。

カコいつの間にか寝ている。

北斗「おい、おいおばさん！」

北斗、ポケットから赤い紐を取り出

して落ちないように自分とカコをく

くりつけて走り出す。

北斗の背中に顔を当てているカコ。

○大勝湯 女湯脱衣場 夜

暗い脱衣所に布団を敷いているカコ。

指輪の小箱を取り出し、領収書と給

与明細をみてから指輪を左の薬指に

無理矢理はめてにつこり笑う。

○満天食堂前 朝

飼育係の作業着姿の北斗が自転車に油をさしているとカコがやってくる。

カコ「よ！ 仕事？」

北斗「おう」

カコ「チャリで行ってんだ。目の前なんだから電車乗りゃあいいのに」

北斗「う、うるせー。いいだろ、別に」

カコ「別にいいけど。そう言えば、何でやめちゃったの、運転手」

北斗「（更に大きな声で）関係ねーだろ！」

カコ「関係ないけどあんな好きだったのに」
電停に電車が近づいてくる。

北斗「うるせえ、馴れ馴れしいんだよ、ババア！」

自転車で乗って去って行く北斗。

カコ「何だよ、アイツ、腹たつな」

○写真館 前

レトロな写真館の前に停まる軽ワゴン。

車から降りて出前箱を持つカコ。
重さにふらつき出前箱を倒しかけると、咄嗟に支える手が伸びる。

南田「大丈夫？」

カコ「すみません、どうも」

首にカメラを下げた南田修（45）が出前箱を持ち上げる。

南田「わ、女性がこんな重たいもの持って」

カコ「あの、大丈夫ですから」

南田「2階でしょ？ ちようど俺も飯だし」

南田、カコの顔をみて驚く。

南田「!!! カコ……?」

カコ「えー!?!」

○フラッシュ

港で抱き合うカコ(25)と南田(35)。

船から手をふる南田(35)。

○写真館 中 階段

出前箱を持つ南田の後を歩くカコ。

南田(45)は変わらずカッコイイ。

南田「久しぶりに手伝いで呼ばれてさ。い

やー、まさかカコと会えるとは! 函館

まできた甲斐あったよ」

カコ、南田と距離を置きながら歩く。

カコ「嫌味ですか。もうババアですよ」

南田「歳とったのはお互い様だろ。でも化

粧くらいしたら? 勿体ないよ可愛いの

に」

楽しそうにカコに笑いかける南田。

苦笑を返すカコ。

南田「ね、今日時間ある? 晩メシどう?

ベイエリアに新しく出来たイタリアン」

カコ「……」

カコ、鏡に映る姿を見る。スウエツ

トとTシャツ、化粧つけのない疲れ

た顔。

○イタリアンレストラン 夜

港の見える高級そうなレストラン。

向かい合って食事をするカコと南田。

カコ、化粧や髪をしっかりと整えきれ

いなワンピース姿。太ってはいるが

普段よりもだいぶ美しく若々しい。

南田「ほら、やっぱり！ ちゃんと磨けば

可愛いんだから、勿体ないよ」

カコ「なんかすみません、服まで買っても
らって、あとで全部払いますから」

南田「いいってことよ！ サロンも服も、

撮影で世話になってるとこだから」

ウェイターがメニューを持ってくる。

南田「俺はペリエで」

カコ「あれ？ お酒は？」

南田「やめてるんだ。飲むと太っちゃうか
らね、中年になったら色々節制しなくち

や。あ、カコは何飲む？」

カコ「……私もペリエで」

× × ×

カコ、お腹に手をあて、お腹が鳴る

のを必死で隠している。

卓には、大皿に少量ずつ上品に盛り
つけられた野菜中心のヘルシーな料

理。

料理をちまちまとつまむカコ。

南田「今日はいいの？ 旦那さん」

カコ「えっ？」

南田「きれいだったよな、カコの花嫁姿。
お姫様みたいで。でも、あんな写真付き

のメール届いてさ、俺、凄く悔しかった」

カコ「えっ！（南田の顔を見つめる）」

南田「あの下手糞な写真。被写体が台無し！

本当勿体ないと思ったよ。俺がその場に
いたらどれだけいい写真が撮れたか、十

年経っても心残りでさ」

カコ、膝の上の白いナプキンを握る。

カコ「そういう意味だったんですね、今すぐ会いたいって……」

○回想 空港ロビー

ウエディングドレス姿に、片足裸足のカコ（25）が白い裾を握って泣いている。

携帯電話のメール画面に南田からの「今すぐ会いたい」という表示。

しかし電話をかけても繋がらない。

○回想戻り イタリアンレストラン 夜

南田、親指と人差し指で四角い枠を作り、カコに向けてアングルを考え

南田「今でも、ちゃんと綺麗にしてたら可愛いのに、やっぱ主婦になると難しいか」

カコ「してません」

南田「え……」

カコ「してないですよ、結婚なんて！ してないし、絶対しない！ ていうかもう、今更こんな姿じゃ出来る訳ないじゃん！ 返してよ、私の十年、返してよ！」

店を飛び出すカコ。

残された南田、状況が理解できない。

○大衆酒場 中夜

カウンターで、ポテトサラダをつまみに一人でチューハイを飲むカコ。

カコ「それからジャガバタ！ 塩辛載せで」
店員「ジャガイモぼっかりっすね」

カコ「今朝のニュースで、きたあかりの新じゃががね。ポテサラつつたらここでし

よ」

豪快にチューハイを飲み続けるカコ。

北斗が入ってくる。

北斗「うわっ、何だよ、厚化粧でヒラヒラ
しやがって」

1席あけてカウンターにつく。

北斗「ポテサラと、ジャガバタ塩辛載せ、

あと、チューハイ」

カコ「真似すんなよ！」

北斗「真似じゃねーよ、ポテサラったらこ
こだべ。今朝のニュースできたあたりが」

笑ってしまうカコ。

北斗「何だよ？」

カコ「何でもない。飲めばやってけらあ！」

北斗のチューハイを奪って飲むカコ。

北斗「おい、ババア！」

酒を取り合いじゃれているうち醤油
瓶が倒れ、カコのワンピースが汚れ
る。

カコ「わー、せつかく買ってもらったのに」

北斗（驚き）……誰に？」

カコ「何？ 気になるの？」

嬉しそうに北斗を見るカコ。

北斗「そ、そんなじゃねーよ、ババア」

チューハイを一気に飲み干す北斗。

北斗「帰る！」

カコ「あ、ちよつと北斗お！」

勢い良く戸を閉めて去っていく北斗
を見て嬉しそうに笑うカコ。

○大衆酒場 前の道 夜

店から出てきた北斗、酔っぱらいフ

ラフラ歩く鳥爺と会う。

鳥爺「北斗さん、腹減った。お肉は？」

北斗「悪い、また今度な！」

鳥爺「かたまり肉？」

○バー 店内 夜

入ってくるカコ、店内を見直し

カコ「あれ？ アイツは？」

ママ「北斗？ 今日来てないけど、あら、

何か今日きれいじゃない？ デート？」

カコ「そんなんじゃないですよ。もう最悪」

ウイスキーをストレートで飲むカコ。

× × ×

ワンピースの醤油のシミをいじりな

がらくだをまくカコ。

カコ「どれだけ大変な十年だったかとか、

全く解ってないんですよ。突然現れて、

悪びれもせずにはらへら笑って……」

更にウイスキーを飲むカコ。

カコ「簡単に許せる訳ないじゃないですか」

少し離れた席で飲みながら市電のプ

ラモデルを作っている常連客の森田。

カコ「かっこいいっすね」

森田「だろ？ 函館市電8000形」

電車の描かれた外箱を見ているカコ。

カコ「そういえばママ、北斗って、何で運

転手辞めたんすか？」

ママ「うーん、もう十年も前の話だけどね」

森田「北斗かい、色々大変だったよなあ」

○十字街そばの路上 夜

終電が終わり、人気の無い線路の上

を一人でふらふら歩いているカコ。

ママの声（回想）「運転中にね、白いもの見ると脇見しちゃうようになってね。探してたんだらうね、カコちゃんのこと」

森田の声（回想）「でもだからって、運転手から飼育係ってねえ。どっちも市の職員だけど、普通あるかい？ そんな異動願
い」

十字街の交差点で空を見上げるカコ。
無数に張り巡らされた電線がオレン
ジ色のネオンに照らされている。

カコの声（回想）「どれだけ大変な十年だったかとか全く解って……」

そのまま仰向けに倒れ込むカコ。
カコ「……解ってないのは私じゃないか」

両手を電線の下にかざす。

電線の向こうに月が見える。

カコ「あれ、お母さんのお通夜の日だっけ」

○回想 十字街 夜

路上で泣いている黒い服のカコ（12）。
赤い自転車に乗った北斗（12）がや
つてきてカコの隣に座る。

赤いあやとり紐を取り出す北斗。

「月に群雲」の形を作り空にかざす。
電線の向こうに見える月と重なる。
笑い合うカコと北斗。

自転車を二人乗りして帰る北斗。
カコが寝ていることに気づき、あや
とり紐で2人の体を結んで走り出す。

○回想戻り 十字街 夜

電線に手をかぎすカコ。その中に月が浮かんでいる。

カコ「よかつたな、昔は……」

空を見上げるカコに忍び寄る男の足。

鳥爺「……豚のでつかい固まり肉？」

カコの背後に立ちヨダレをすすする鳥爺。

鳥爺がカコの白い二の腕に噛み付く。

カコ「いやー！ー！！」

○電停 どつく前 朝

始発で帰ってくるポロポロの姿のカコ。

自転車を出している北斗と目があう。

北斗「朝帰りかよ、ババア」

カコ「(涙目で) 北斗お？」

北斗に寄りかかろうとするカコ。

カコの腕や首筋にキスマークにも歯形にも見える微妙な痕が無数にある。

北斗、カコを突き飛ばす。

北斗「なっ、生々しいもん見せてんじゃねーよ、気色悪いんだよ、ババア」

カコ、涙目で北斗を見上げる。

北斗、カコに背中を向けて

北斗「べっ、別に俺、焼きもちとか焼いてる訳じゃねーからなっ！ ただよ、そんなふしだらな気持ちじゃ、出前もメシ炊きもできねーだろって、そう言っただよー！」

カコ、答えずとその場を去る。

北斗「おい、無視してんじゃねーよ！ バ

カ！ ババア！ パート！！」

自転車に乗って去る北斗。

肩を震わせて歩道にしゃがみ込むカ

コ。

別の電車が電停に入ってくる。

降りてくる南田、カコに気付く。

南田「カコ？ おい、どうした？」

涙目で南田を見上げるカコ。

南田「おい、どうしたその痣？」

カコ「怖かったよお……」

カコの痣を優しく撫でる南田。

北斗「やつべー、弁当忘れた……」

自転車で戻ってくる北斗。

カコと南田の様子を見てしまう。

○バー 店内 夜

焼酎ボトルを勢いよく開ける北斗。

市電のプラモデルを作っている森田。

だいぶ完成に近づいているプラモデ

ル。

森田「最近、カコちゃんどうしてる？」

北斗「カコ！？ 寝てるよ、小屋ん中で」

森田「……ごめんあのパートの方の」

北斗「(野太い声ですごむ) ああ！？」

ママ「(小声で森田に) それ禁句。カコちゃん。

最近イケメンの運転手つきでね」

森田「へー、太っても孔雀姫様かあ」

○大勝湯 女湯脱衣所 夜

着替えるカコの痣が薄くなっている。

カコが化粧をしていると璃子が近づ

く。

璃子「カコちゃん最近きれいね。こいでも

してるのかしら？」

カコ「(驚いて) えっ! 何を突然」

璃子「つてママが言ってた」

番台に座っている里奈、笑う。

璃子「あとね、あのアバズレ! つて」

カコ「ええええつつつ!？」

驚いて里奈を見るカコ。

里奈「ちよつ、ちよつと璃子!」

璃子「北斗が言ってた。アバズレって何？」

里奈「璃子!」

○大勝湯 前夜

化粧をし、スカートを着て出てくる

カコ。

北斗とすれ違いが互いに無視する。

カコ、停まっていた南田の車に乗る。

○水産海洋研究センター裏の波止場 夜

どつくの船がライトアップされ、対

岸に函館駅前や五稜郭タワーの光が

輝く。

車が停まりカコと南田が出てくる。

カコ「すごい! いつの間にかこんな所」

南田「秘密の夜景スポット! 街出る直前

にこんないい場所見つけちゃうなんて、

やっぱり俺ツイてるぜ!」

カコ「……また、行っちゃうんだ」

○大勝湯 男湯脱衣所 夜

プロレスごっこをしている北斗と璃

子。

璃子、北斗の腕に噛みつく。

北斗「いってー！」

璃子「へんたい、噛みつき男だぞー！」

北斗「何だよそれ？」

璃子「噛みつき男だよ、ほら、きもーい！」

新聞の地方欄に「ほっちゃり女性ばかりを狙う!? 変態噛みつき男、

御用！」という見出しと鳥爺の顔写

真。

真。

被害者の痕の写真がカコの痣と酷似。

北斗、驚き店を飛び出す。

○水産海洋研究センター裏の波止場 夜

いいムードで並んで歩くカコと南田。

南田、カコに向けてカメラを構える。

カコ「いいよ、夜景が台無しになっちゃう」

南田「すぐそうやって。もっと前みたい

自信もてよ」

カコ、足を止める。

南田「……ごめん、俺のせいだもんな」

カコ「もういいですよ、昔のことだし。だ

から、気い遣って車で送ってくれるのと

かも、もういいですから」

南田「そんなじゃないよ、俺はカコが心

配だから」

カコ、無理矢理に笑顔を作って

カコ「大丈夫。変質者も顔見ればガツカリ

して逃げてくつて。うわ、残念って」

南田、真顔でカコの肩をつかむ。

南田「またあの頃の、可愛いカコに戻りた

いって思わないか? 失った十年分の時

間、取り戻させて欲しいんだ！」

カコ「へ？……」

南田「俺と一緒にいれば絶対にまた、あの頃のカコに戻る！ 今度こそ、カコの花嫁姿、目の前で見たいんだ。一緒に来てくれないか？」

カコ、しばらく無言で夜景を見ている。

○線路沿いの路上 夜

錆びたチェーンの音が響く。

北斗がひたすら自転車走っている。

北斗「うわー！ー！！！」

○満天食堂前 夕

店を出て深々と頭を下げるカコ。

カコ「お世話になりました」

徳、振り向かず求人チラシを貼る。

徳「そんな事だろうと思っただよ。北斗には会わずに出てってくれないかな。あいつの落ち込む顔見るの、辛いんだよ」

カコ「そのつもりです、それに落ち込みませんよ、もう」

○大勝湯 前の道 夕

カコが歩いていると、後ろから自転車に乗った北斗が声をかける。

北斗「店、やめたんだってな、ババア」

カコ「うん」

北斗「せいせいするぞ、どこでもいっちゃまえ！ そしてもう二度と帰ってくんない」

カコ「うん」

北斗「……それから、……悪かったな」

カコ「え？」

北斗「変質者、捕まったってよ」

自転車で去ろうとする北斗。

カコ「北斗！ ごめんね」

足を停める北斗、振り向かずに。

北斗「俺のことなんて心配すんな！ 俺に

は孔雀になっちまったカコが居るからよ。

人間に戻らなくても、アイツと死ぬまで

添い遂げてやらあ！ 達者でな、おぼさ

ん！」

去って行く北斗。

○イタリアンレストラン 夜

向かい合い合い食事をするカコと南田。

カコ「今日、ワイン飲んでもいいですか？」

南田「珍しいね。何か嫌なことあった？

飲まなきややつてられないような」

カコの元にグラスワインが届く。

一気に飲み干し笑うカコ。

カコ「何言ってるんですか。もしかして、

忘れちゃったんですか？ 私が十年生き

て来れた、魔法の呪文なのに」

南田「えー、何？ なんだっけ？」

カコ「飲まなきややつてられんのじゃない、

飲めばやってける！ ですよね？」

南田「うわ、それ超いいフレーズだね。ポ

ジティブで。俺も使わせてもらおう！ つ

て、酒やめてるのに、誘うなよお！」

カコ「え？……」

○バー 店内 夜

カウンターでハイボールを飲むカコ。

ママ「せっかく帰ってきたと思ったら」

カコ「今度はもう本当に、戻ってこないと

思います」

ママ「なら、これ、持ってつてくれない？」

店の奥からラベルが剥がれかけた古

い焼酎のボトルを持ってくるママ。

ママ「カコちゃんのこと」

カコ「うわー、懐かしい！ こんな処分

しちゃって良かったのに」

ママ「だって北斗が捨てないで！ ってう

るさいから……」

カコ、ボトルにマジックで書かれた

落書きを眺めているうち手を止める。

○大勝湯 女湯脱衣場 朝

カコの荷物が整理されて、トランク
が一つ置かれている。

「忘れもの」と書かれた荷物の箱の中
に、薄汚れた片方だけの白いハイヒ
ールが見える。手に取るカコ。

カコ「ちよつと散歩してくる」

ハイヒールを持って出て行くカコ。

○船見公園 朝

黄ばんだ白いハイヒールのかかとを
持ってクルクル回しながら、赤いブ
ランコをゆつくり揺らすカコ。

錆び付いてキィキィなるブランコ。

カコ、片方の足に白いハイヒールを
はいて勢いよくブランコをこぎだす。

ブランコが一番高いところまで来た

○満天食堂 中朝

所で靴を蹴り飛ばす。

勢いよく入ってくるカコ。

カコ「くっそ、全部全部、とんでけー！」

カコ「おじさん、北斗は？」

空の向こう、港の方向目指して白い

仕込みをしていた徳、カコを睨みつ

靴が飛んで行く。

け

船の汽笛の音がする。

徳「もう来んなったべや！」

○船見公園前の坂道 朝

坂道を下るカコ、ラジオをさげた老

カコ「おねがい！ おじさん！」

人とすれ違ふ。

店の電話が鳴り、出る徳。

ラジオDJの声「ここで、残念なニュース

徳「北斗ですか？ もう出ましたけど……

です。函館公園の動物園で市民の人気者

えつ、本当ですか？ すみません！ す

だった白孔雀のロベルトが、今朝亡くな

ぐ取っ捕まえますから！」

りました」

電話を切る徳。

足を止めるカコ。

徳「おい、北斗どこいった？」

カコ「だからそれはこっちが！ てか、何

だつて？」

徳「孔雀の死体と北斗が居なくなつたつて」

カコ「やっぱり！」

慌てて店を出るカコ。

○路上

走るカコ。

北斗の声（回想）「アイツと死ぬまで添い遂

げてやらあ！」

カコ、息を切らして走る。

携帯電話が鳴り続けるが気付かない。

○函館港 フェリー乗り場

乗船口で待っている南田。

カコに何度も電話をかけるが出ない。

南田「……」

一人で船に乗り込む南田。

○立待岬

パトカーや野次馬が集まっている。

崖の柵の向こうに、孔雀の亡骸を抱

き締めて立っている北斗。

北斗「うるせえ、近寄ったらすぐ飛び降り

んだからな！」

汗だくで息を切らして走ってくるカ

コ。

警察「とにかくまずは鳥をこっちに渡して」

北斗「鳥じゃねーよ！俺の花嫁だ！」

野次馬「あー、頭おかしい系だ」

携帯で写真を撮ろうとしている野次

馬。

カコ「（野次馬に怒鳴る）うるせえ！」

カコの大声に気付く北斗。動揺する。

徳がカコに近づいて小声で話す

徳「何で来たんだ。余計なことすんなよ！」

周囲が見守る中、カコは鞆から焼酎のボトルを出し北斗に投げつける。

北斗、驚きながらもキャッチする。

周囲がざわめく。

カコ「さすが元キャッチャー」

北斗の足下で石が崩れ落ちる。

北斗「あっ、あぶねー！死ぬところだった

たろ！ババア！」

警察がカコを取り押さえる。

北斗の足が震えている。

カコ「飲めよ！」

北斗「はあ？何いってんだよ」

カコ「どんなにつらいことあっても、飲め

ばやってけるんだろ？」

北斗の手の中にはバーに十年置いてあったボトル。無数の落書きの中に下手な文字で「飲めばやってける！by北斗」と書かれている。

遠くで汽笛が鳴る。

北斗「何しに来たんだよ、船出るぞ！」

カコ「あんたに聞きたいこと思い出してさ」

北斗「なんだよ」

カコ「まあいいよ、とりあえず飲めよ」

北斗、ボトルを開けて一口飲む。

北斗「死ぬ前に、一杯やれてよかったよ」

カコ、赤いあやとり紐を取り出し、あやとりをしている。

北斗「って、何を呑気な！説得すんだろ、

普通」

カコ「この次どうだっけ？」

北斗「ああ!？」

カコ「十字街の月」

赤い紐がカコの手元でこんがらがる。

北斗「全然ちげーよ! 中指の構えから、

親指の向こう側の紐の上通って」

やろうとするが出来ないカコ。

北斗「だからそうじゃねーよ! 親指の紐、

そっちのこれをこう、外すんだよ!」

北斗、カコの前まで行き紐をつかむ。

カコ「かかったな!」

北斗の腕をつかむカコ。

警察達が北斗を押さえつけ救出する。

カコN「その後の記憶はお恥ずかしながら

とびとびで……」

○天ぷら屋 店内 夜

芋天をつまみにビールを飲みまくる

カコ、北斗と常連客たち。

カコN「ちなみに、孔雀の遺体も無事戻ったので、北斗はひとまず首は免れたけど」

○大衆酒場 店内 夜

ポテサラとジャガバタ塩辛載せをつ

まみにチューハイを飲む北斗とカコ。

カコN「飼育係はクビになり」

○バー 店内 夜

ハイボールを飲むカコの隣でポトル

の焼酎を飲む北斗。

○松風町 繁華街 夜

ネオン煌めく中を歩くカコと北斗。

新しいボトルにマジックで「飲めば
やっつけてやる！」と書き足すカコ。

カコN「別の仕事に異動させられるらしい」

○十字街 明け方

交差点であやとりをするカコと北斗。

カコ、裸足の千鳥足ではしゃいでい
る。

カコN「気がついたら朝になってて」

○函館公園 動物園 早朝

人気のない早朝の動物園。

白孔雀の鳥小屋の前で寝ているカコ。

カコN「久しぶりにまた外で寝てしまった」

その寝顔を横で見ている北斗。

北斗、鳥小屋の鍵を開け、わらの積

み重なった奥から汚れて茶色くなっ
た白いハイヒールを取り出す。

× × ×

目をさますカコ。

片足に、白いハイヒールを履いてい
る。

隣でいびきをかいて寝ている北斗。

カコ「北斗、おい、北斗起きろ！」

目をさます北斗。

北斗「おう、水買ってこいや。カコ」

カコ「!!!」

○満天食堂 厨房 朝

炊飯器の蓋を開ける北斗とカコ。

北斗の眼鏡が曇る。そこに人差し指
で目を書き足すカコ。笑い合う2人。

徳「メシにすんぞ」

○満天食堂 食堂 中 朝

白いご飯に焼きたらこを乗せるカコ。

塩辛を乗せる徳。

カレーライスを食べる北斗。

徳「カコ、おかわりは？」

カコ「いる！ あ、私もカレー欲しい」

北斗「真似すんなよ」

白いご飯に熱々のカレーの湯気。

○市役所

人事課とかかれたプレート。

北斗が頭を下げている。

北斗「運転手に戻してください！」

○船見公園

ブランコに乗る北斗の頭に運転手の

帽子を乗つけるカコ。

カコ「やったな！」

○船見公園の横の坂道

赤い自転車に二人乗りで坂道を下る

カコと北斗。

○船見公園からの函館実景

青空が曇り、雨がぽつぽつ降り出す。

○質屋 店前

雨に打たれながら驚いた顔で、シヨ

ーケースを覗いている北斗。

カコの婚約指輪が並んでいる。

北斗「……何なんだよ、アイツ！」

走っていないくなるカコ。

○大勝湯 男湯脱衣場 夜

慌てて駆け込んでくる北斗。

北斗「おい、カコ！ あれ？ あいつは？」

番台の里奈に声をかける。

里奈「カコさん？ そういえば、帰ってきた

てないね、璃子、カコちゃん見た？」

璃子「ちよつくら失礼！ って」

驚く北斗。

○回想戻り 大勝湯 男湯脱衣場 夜

璃子の肩をつかむ北斗。

北斗「璃子、カコがそう言ったのか？」

璃子「うん。ちよつくら失礼、って何？」

里奈「ちよつとごめんね、ってお出かけす

るときにね……」

呆然とした顔の北斗。

○回想 船見公園横の坂道

ウエディングドレス姿で坂道を駆け

下りるのカコ（25）、振り返り、紋付

袴姿の北斗（25）に声をかける。

○船見公園 夜

街と港の夜景が見える。

缶ビールを飲みながらブランコに乗

っている北斗。

北斗「飲めばやってけますから」

カコ「ちよつくら失礼！」

○満天食堂 朝

出勤しようとする北斗に声をかける
徳。

徳「無理なら休めよ。お客さんの命預かる

仕事なんだから」

北斗「大丈夫。俺もう逃げないから。もう

現実逃避はやめたから」

○船見公園からの函館の街 実景

木々の色が秋色になってくる。

テロップ「3ヶ月後」

○電停 函館どつく前

電車が停まりトランクを引いたカコ
が降りてくる。

× × ×

北斗の運転する電車が到着する。

交代の運転手に引き継ぎし、降りて
きた北斗の背後に近づくカコ。

カコ「ただいま」

北斗「てめー！ どこ行ってやがった！」

カコ「ちよっくら出稼ぎに」

北斗「はあ!？」

カコ「北斗、お話があります」

北斗「聞きたかねーよ」

カコ「そこを何とか。ね、ちょうど昼休み

でしょ？」

○坂道

お墓の並ぶ道を嫌々上る北斗の背中
を押すカコ。

北斗「何なんだよ！ ていうかお前、俺の

やった指輪をよお……」

電波が乱れる。

カコ「はい頑張つて！ もうすこし！」

カコ「もー、何だよ、大事な時に！」

ラジオを叩くが雑音は止まらない。

○墓地

港と街を見下ろす墓地に着く2人。

北斗「休憩、終わるからもう行くぞ」

カコ「到着！ お昼にしよつか」

カコ「あー、もう待つてよ、しようがないな。

おにぎりを北斗に差し出すカコ。

じゃあ自分で言うう！ 買ったからね。北

携帯ラジオを出しFMまりんをつける。

斗の3ヶ月分と、私が出稼ぎした3ヶ月分、合わせて6ヶ月分で！」

北斗「お前、指輪、質屋に売ったろ？」

カコ、真新しい小さなお墓を指差す。

ラジオを耳に当てているカコ。

北斗「はあ！？」

カコ「ラジオの投稿って読まれないもんだね。コツあるの？ 眼鏡ライスポールさ

カコ「俺が死んでも一人で生きてけるように、とかそういうのいらなからさ、死

ん」

んでからもこの街で一緒にいようねって、

北斗「話そらしてんじゃねーよ！」

そういう約束してよ」

ラジオに外国の無線の音が混じって

お墓には家紋の代わりに、電車の車

輪の中に温泉マークの入った模様。

北斗とカコの名前が赤色で入っている。

ラジオから音楽が流れてくる。

カコ「あー、なおった、今さら！」

○「エンドロール」

○墓地

街を見下ろすカコと北斗。

ラジオDJ「ラジオネーム、帰ってきた孔

雀姫さんからのリクエストでした。プロ

ポーズ、成功しているといいですね」

カコ「成功してるといいですね」

背伸びして北斗の顔を見つめ笑うカ

コ。

カコの両足には茶色と黄色に変色し

古くなった白いハイヒール。

(了)

本電子書籍は、2014年12月5日発行の『第20回函館港イルミネーション映画祭2014 第18回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第20回函館港イルミネーション映画祭2014

第18回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

白孔雀 白い花嫁 白い米

作：室岡ヨシミコ

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2015年3月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
